



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2954 号 2016.4.10 発行

精神障害者向け割引運賃設定、鉄道会社の3割 全国調査 久永隆一

朝日新聞 2016年4月9日

全国の鉄道事業者のうち、統合失調症などの精神障害者向けの割引運賃を設けているのは3分の1にとどまっている。身体障害者と知的障害者はすべて割引運賃の対象だが、精神障害者については対応がバラバラだ。当事者の家族でつくる全国精神保健福祉社会連合会の調査でわかった。調査は昨年12月から今年2月にかけて、電車やモノレールを運行する157事業者を対象に聞き取るなどして実施。精神障害者への運賃割引をしていたのは52事業者(33%)だった。同連合会は、精神障害者も対象に含めるよう事業者に要請。これに対し、事業者側は「割引の対象を広げれば、その分は一般の乗客に料金負担をお願いすることになる。社会的理解を得るのは難しい」などと説明しているという。



【著者は語る】ミライロ社長・垣内俊哉氏『バリアバリュー』

SANKEIBIZ 2016年4月9日

□『バリアバリュー 障害を価値に変える』

■視点を変えるだけで人生は変わる

出版の誘いを受けてきたが時期尚早と断ってきた。しかし、2013年に手術後の経過不良で心肺停止に陥り「自分の思いを残しておきたい」と決意、生い立ちから創業までの道のり、ミライロの今日までを振り返りながら、障害を価値に変える「バリアバリュー」の価値観をつづった。

印刷工場の締め切り30分前まで、その思いを私なりの言葉で詰め込んだ。それは、車いすに乗る私の目線(高さ106センチ)から気づいたユニバーサルデザインやユニバーサルマナーに対するこだわりだ。

読者は当初想定したビジネスマンや経営者だけでなく、学生や障害者を持つ親など幅広い層に広がり、3月18日の発売から1カ月もたたずに重版が決まった。バリアバリューという価値観の広がりを楽しんでいる。新入社員研修用に購入してくれた企業もあった。ビジネス書として書いたが、学校や図書館に置いてくれるとも聞いた。さらにうれしいのは視覚障害者向けに音声版も早ければ5月にも出すという。

多くの人に受け入れられているのは、いわゆる障害にフォーカスしたのではなく、コンプレックスや不得手といった「弱点」も見方を変えれば「強み」「価値」に置き換えることができるという考え方からだと思う。例えば、人見知りや話すのが苦手という弱点は、巧言令色を潔しとしない誠実という強みにつながる。ビジネスにおいて誠実さほど大切なバリューはないと個人的には思っている。仕事が遅いという弱みは、人より丁寧な仕事をして量より質で成果を上げる強みになる。視点をちょっと変えるだけで人生は大きく変わる。

初めての出版を記念して28日に東京で講演会を開く。場所は羽田空港国際線旅客ターミナル4階ホール。会場を羽田空港にしたのは「世界に飛び出そう」という意気込みから。



私たちの思いであるバリアバリューの価値観を世界に広げたい。(1296円 新潮社)

【プロフィール】垣内俊哉 かきうち・としや 立命館大経営学部在学中の2010年ミライロを設立し社長。企業や自治体などにユニバーサルデザインのコンサルティングを手掛ける。15年日本財団パラリンピックサポートセンター顧問。26歳。岐阜県出身。

野菜栽培で障害者雇用 松山のスーパーと飯山市協定 産経新聞 2016年4月9日

四国・中国地方でスーパーやショッピングセンターを展開する松山市の「フジ」(尾崎英雄社長)は、児童数の減少で3月末に閉校した飯山市立岡山小学校の校舎を利用して障害者が働く事業所を開設することを決め、8日に同市と協定を結んだ。9月から野菜栽培などの農業活動を開始し、「飯山市産の野菜」を前面に出して同社の店舗網で販売する計画だ。

事業所の設置は、同市議会が高知県内で障害者雇用に先進的に取り組む食品容器加工会社を視察したのがきっかけ。同社の仲介によりフジと飯山市の間で福祉と農業の連携プロジェクトを進めるに至った。

協定によると、開設するのは、障害者と雇用契約を結んで最低賃金を保障する「就労継続支援A型事業所」。初年度は障害者約10人とスタッフ約5人で2・5ヘクタールの規模で地元産伝統野菜のサトイモ「坂井芋」や大根、ニンジンなどを栽培。次年度以降は栽培面積を2倍に増やし、20人程度の障害者雇用を計画する。

県庁での調印式で、同市の足立正則市長は「飯山市にとって初めてのA型事業所であり、農福連携のモデルになるように連携して進めたい」と述べた。

尾崎社長は「信州野菜はポテンシャルが高く競争力があり、消費者の評価も高い。地域に貢献し、だれもが居場所と出番がある社会を目指したい」と応えていた。



介護と農業担う知的障害者育成 塾開所

河北新報 2016年4月9日
介護、農業分野の担い手育成を目指すはらから蔵王塾の開所式

社会福祉法人はらから福祉会(本部柴田町)は5日、障害福祉サービス事業所「はらから蔵王塾」を蔵王町遠刈田温泉の別荘地「蔵王山水苑(えん)」に開設した。知的障害者の専門学校と位置付け、介護と農業に携わる人材を4年

間で育成する。

開所式には関係者約30人が出席。福祉会の武田元・理事長は「地域ぐるみで介護と農業の働き手に育て、4年後に一人前となって巣立つことをこの目で確かめたい」とあいさつ。入所した塾生3人が「自立のためここで働くことを決意した」「休まずに頑張りたい」などと抱負を語った。

校舎は改修した旧保養施設で、塾生のグループホームも整備した。4年間をめどに介護や介護補助の仕事、農産物の生産・加工・販売の基礎を近隣の高齢者施設や農地で学び、就労につなげる考え。蔵王山水苑を拠点に福祉の地域づくりに取り組む企業団体やボランティアも運営に協力する。

はらから蔵王塾の定員は20人。特別支援学校の高等部卒業程度で、障害福祉サービスの受給者証を取得(見込みを含む)している知的障害児者を募集中。連絡先は0224(26)6606。

児童や教職員の力に 社会福祉士の資格に挑戦 前国東小校長

大分合同新聞 2016年4月9日

今春、教職員を定年退職した国東市国東町鶴川の岡松寛さん（60）が社会福祉士の国家資格取得を目指して専門学校へ進学した。学校への配置が進む新しい福祉専門職「スクールソーシャルワーカー」（SSW）を将来志すため。腎臓病の人工透析を受けながらの挑戦だが「困っている児童や教職員の力になりたい」と意気込んでいる。



腎臓病の人工透析を受けながら専門学校生として学ぶ岡松寛さん＝国東市国東町鶴川

岡松さんは今年3月まで国東小学校の校長。38年間の教職員生活では、県教委汚職事件で校長が逮捕された蒲江小学校（佐伯市）に後任校長として赴任した。「児童は必ず成長して応えてくれた。絶望も徒労感も覚えたことがない」と振り返る。

貧困、虐待…。触れ合ってきた中にはさまざまな困難を抱える児童も。学校だけでは対応が難しいと感じてきた。そんな中、小中高校などを拠点に児童相談所や警察、医療・福祉機関などと連携し、いじめや不登校などの問題解決を図るSSWを知った。「現場経験が生かせる上、児童だけでなく、保護者や教職員の手助けにもなれる」と思ったという。

県教委によると、SSWの要件に社会福祉士などの資格を加えるかは各自自治体が判断する。国東市内は現在、SSW未設置で今後も未定だが「設置された時に専門的知識があれば支援の幅も広がる」と考えて積極的に取得を決めた。

昨冬ごろから慢性腎炎の症状で日常生活にも苦しんできたが、2月から始めた透析治療で体調が回復したことも決断を後押し。「まだ活躍できると思った」と喜ぶ。進学先は京都医療福祉専門学校（京都市）。社会福祉士の養成課程（通信制）を1年7カ月かけて学ぶ。「資格を得て出向く学校で新たな児童と出会えることを楽しみにして勉強に励みたい」と話している。

<メモ> SSWは文部科学省が2019年度までに全国全ての中学校区に配置する目標を掲げるが、人材不足などの課題が指摘されている。県教委によると、15年度の配置人数（把握分）は県立高校がゼロ、小中学校は大分市内の5人が最多。県補助金を使う場合は社会福祉士か精神保健福祉士の資格を要件にしている。独自予算で元教職員を採用している自治体もある。

障害者・高齢者向け「ヘルプカード」、札幌のNPOが作成 円山史



朝日新聞 2016年4月8日
かかりつけの医療機関や既往症、アレルギーの有無などを書き込めるヘルプカード

障害者や高齢者がいつでも適切な治療や支援を受けられるよう、札幌市中央区のNPO法人「札幌肢体不自由児者父母の会」が携帯用の「ヘルプカード」を作った。緊急連絡先や障害の有無、かかりつけの病院名などを書き込める。同会は「万が一に備え、家族に持たせる習慣をつ

けてほしい」と呼びかける。

■連絡先・障害有無・かかりつけ・服用薬・アレルギー……

ヘルプカードはパスポート大で、日頃飲んでいる薬の種類やアレルギーの有無まで細かく記録することができる。緊急時や災害時にこのカードを医療関係者に見せれば、言葉で説明する手間を省ける。

同会が2年前に会員らにアンケートをした際、「災害が起きた時に子どもと一緒にいられるとは限らない。障害のある子どもがきちんと治療や支援を受けられるか不安だ」などの声が寄せられた。障害によっては、体調やけがの有無などを言葉でうまく説明できないこ

ともあることから、昨年11月にカードを製作した。

同会は、札幌市内の養護学校や障害者施設などに数十部ずつ配布し、利用を呼びかけている。特に養護学校などで好評だといい、同会は「障害のある人だけではなく、認知症の高齢者にも勧めたい」という。ヘルプカードは同会のHP (<http://npofubo.or.jp/>) からダウンロードして印刷することもできる。

■動き全国に拡大 北海道内の普及はこれから

ヘルプカードをつくる動きは全国で広がっている。

(挑む!) ポジティブに幸せへのお手伝い 文・十河朋子 写真・堀内義晃

朝日新聞 2016年4月9日



兵庫県明石市の障害者・高齢者支援担当課長として働く弁護士青木志帆さん。いまの仕事は「ベスト・ポジション」と話す=明石市役所、堀内義晃撮影

■難病患者で弁護士で市役所課長：青木志帆さん(34)

明石市(兵庫県)の障害者・高齢者支援担当課長に昨年就いた。山のような事案と向き合い、法律面から助言する。窓口で市民の相談にも耳を傾ける。と書くと“バリキャリ”っぽいのが、「周りと壁をつ

くらないよう、努めてヘラヘラしてます」。

脳下垂体の機能が低下する難病を抱える。疲れやすく、ホルモン注射と点鼻薬が毎日欠かせない。20代のころ、医療費助成が一時受けられず、注射代で一度に18万円も請求された。「これじゃ、生きてかれへん」。国民は平等なはず。訴えてやると発起し、2008年に司法試験に合格した。

弁護士として離婚調停などに携わりつつ、重度障害者が自治体に介護の充実を求める訴訟を支えた。やりがいはあったが体がもたない。そんなとき、明石市が弁護士資格を持ち障害者福祉に詳しい職員を募っていると知った。

全盲記者・岩下恭士のユニバーサロン 米国で障害者と最先端技術の祭典 /東京

毎日新聞 2016年4月9日

米サンディエゴで先月21日から開かれた、今年で31回目を迎える障害者とテクノロジーの国際会議「CSUN(シーサン)カンファレンス2016」取材した。CSUNとは、主催する米カリフォルニア州立大ノースリッジ校のこと。障害者のための最先端技術が発表されることから、コンピューターを扱う障害当事者はもちろん、研究者や企業の開発者が全世界から、会場となる米国西海岸最大級のリゾートホテル、マンチェスターグランドハイアットに集まる。

今回の会議では、6日間で350以上の講演とワークショップが開かれ、140社が最新の支援技術を出展。障害当事者や福祉工学研究者、コンピューターエンジニアら約1万人が参加した。毎年、日本からも点字プリンターメーカーなど複数の業者が出展。大手旅行業者のJTBは、ユニバーサルデザインの研究所「ユーディット」が監修する会議参加ツアーを実施しており、私が取材参加した今回のツアーには、ツアーリーダーの関根千佳・同志社大教授をはじめ、特別支援教育関係者ら6人が参加した。

現在、全米の大学には必ず障害のある学生のためのサポートセンターがある。会議は、1980年代からアクセシビリティの普及推進に取り組んできた、当時CSUN障害者センター長だったハリー・マーフィーさんが85年にスタートさせた。IBMやマイクロソフトなど当初から名を連ねていた協賛企業に加えて、今回、参加者向けトートバッグに自社のロゴマークを入れるなど目立ったPRを展開したのはアマゾンとグーグルだった。

まず最初に指摘したいのは用語の問題。「障害者のため」と言えば日本では「バリアフリー」が浸透しているが、同じ意味として会場で使われていたのは「アクセシビリティ」だ。英語では日常会話でも「バリアフリー」とのニュアンスで、「アクセシブル」が一般的に用いられている。次回から、「CSUNを体験せずしてアクセシビリティを語るなかれ」と言われるこのイベントのレポートをお届けする。

■人物略歴 いわたし・やすし 10歳で両目を失明した全盲記者。1986年、毎日新聞社入社。点字毎日編集部を経て、98年から人に優しい社会の仕組み「ユニバーサルデザイン」をテーマにネットコラムを配信。53歳。

川崎市の高齢者施設で火事、4人重傷

JNNニュース 2016年4月9日

9日未明、川崎市多摩区の高齢者施設で火事があり、施設にいた60代から90代の男女4人が重傷を負いました。

午前1時15分ごろ、川崎市多摩区で「火事です。建物が燃えています」と、男性の声で119番通報がありました。火事があったのは、高齢者施設「デイサービスえいわん菅北浦」で、消防車など13台が出動し、火はおよそ45分で消し止められました。

この火事で、施設に宿泊していた92才と84才の女性2人と82才の男性、男性職員(68)の合わせて4人が病院に運ばれましたが、いずれも喉をやけどするなどして、重傷を負いました。

警察によりますと、火事があった建物の2階には別の高齢者施設がありますが、他に逃げ遅れた人やけが人は確認されていません。

火元の施設で高齢者が利用していたベッドの燃え方が激しかったということで、警察と消防は火が出た原因を調べています。

女児を洗濯機の中に 三重・名張が再発防止を指導

NHKニュース 2016年4月9日



ことし1月、三重県名張市の保育園で50代の女性保育士が、子どもたちの面倒を見る際、このうちの1人の1歳7か月の女の子を洗濯機の中に入れて立たせていたことが分かり、名張市は保育園を運営する社会福祉法人に口頭で再発防止を指導しました。

名張市によりますと、社会福祉法人「名張育成会」が運営する市内の保育園で、ことし1月、50代の女性保育士が子どもたちの体

を洗ったりトイレに行かせたりする際、1歳7か月の女の子を近くの洗濯機に1分ほど入れて立たせました。洗濯機の中は空で、女の子の頭が外に出て保育士から見える状態だったということですが、保育園は「安全管理上、問題があった」として、女の子の保護者に謝罪したということです。この女の子がいるクラスでは、5人の保育士で15人の子どもたちの面倒をみることにしていて、保育士は名張市の聞き取りに対し、「女の子が動き回るのでとっさに洗濯槽に入れてしまった。反省している」と話しているということです。

名張市は「不適切な行為」だとして、口頭で再発防止を指導しました。保育園を運営する名張育成会は「2度とこうしたことがないように、再発防止に努めます」と話しています。

成年後見制度促進法が成立 なり手の育成が柱 蔭西晴子 朝日新聞 2016年4月9日

認知症や精神障害などで判断力が不十分な人の財産管理などを行う成年後見制度の利用促進を図る議員立法が8日の衆院本会議で、自民、公明、民進など各党の賛成多数で可決

し、成立した。認知症の高齢者の増加を見据え、後見人のなり手を増やすことが柱。5月上旬までに施行される。ほかに後見人の権限を拡大する民法などの改正法が、6日の参院本会議で可決して成立。公布から半年たった後に施行される。一方、精神障害者団体などから自分で決める権利が侵害されかねないという懸念が出たことを踏まえ、参院内閣委員会は必要な措置を求める付帯決議を可決した。8日に成立した新法は市民から後見人を育成して活用を図ると明記。政府に必要な法整備や財政上の手当てを速やかに講じるよう義務づけた。首相がトップの利用促進会議を内閣府に新設して後見人による横領といった不正防止策などを議論し、3年以内に必要な法整備をすることも定めた。

大阪) カニむきロボット、お披露目へ 東大阪市役所で 朝日新聞 2016年4月9日

リウマチで手が不自由なおばあちゃんが大好きなカニを苦勞せずに食べられるようにと、東大阪市の小学生、加藤未来人(みくと)君(8)が考えたカニむきロボット「カニニカ」が11日から同市役所で展示される。製作の様子を追った動画も大型モニターで流される。

カニの殻をむきにくそうにしているおばあちゃんの様子をみた加藤君。昨春、市内の物づくり企業約70社でつくる東大阪ブランド推進機構による「大切なだれかのために考えた発明品」のアイデア募集に応募し、町工場で作ってもらえる権利を得た。名前には、みんなでカニを食べて「ニカッ」と笑えるように、との思いを込めた。



カニむきロボット「カニニカ」＝東大阪市

その後、町工場など約20社が企業の壁を越えて知恵や技術を出し合い、約9カ月かけて作り上げた。「カニニカ」は2月末に加藤君に贈呈されたが、別に作ったものを今回展示する。

展示は5月31日までの午前9時～午後5時半(土日祝日を除く)、本庁舎1階で。問い合わせは市モノづくり支援室(06・4309・3177)。(稲垣大志郎)

真っすぐな心 向き合う 「真白の恋」知的障害者の恋 映画で世界に発信

東京新聞 2016年4月9日

撮影に臨む坂本監督(左)＝富山県射水市で



知的障害がある女性の初恋を描いた自主製作映画「真白(ましろ)の恋」が完成し、映画配給会社「エレファントハウス」(東京都港区)が国内外の上映に向け劇場と交渉を進めている。主人公「真白」の初恋を応援する町の人々と、娘を心配する両親の思いがぶつかり、障害者の生き方を問い掛ける。(豊田直也)

富山市在住の映画監督坂本欣弘(よしひろ)さん(29)が、故郷の風景を題材とした映画を脚本家北川亜矢子さん(35)に相談。弟が軽度の知的障害者だという北川さんが温めていたテーマを託した。「人を好きになったり、嫌いになったりする感情は、誰にも平等」との思いを脚本に込めたという。

「子どものころから両親に『弟をずっとそばで見たい』と言われ続けてきた」という北川さんには、両親が過保護すぎるようにも映ったという。自ら、家族の中で感じていた自分と、親の弟に対する姿勢の違いを今作で描いている。

坂本さんは「何をもって障害というのかが自分の中で一つのキーワード。親にとって、子どもには健常者と同じように生きてほしいけれど、不安もある。障害者の恋が主題だけ

れど、そこで葛藤する普通の家族の姿を映した」と明かす。

坂本さんは五年前に富山市に帰り、映像製作業で製作費をため、インターネット上で資金を募るクラウドファンディングでも百万円を集めた。

主演は、NHKの連続ドラマ「花子とアン」で主人公の学友を演じた佐藤みゆきさん。真白の初恋の相手役を台湾、シンガポールなどでも活躍する福地祐介さん、父親役はベテランの長谷川初範（はつのり）さんが演じる。

富山県射水（いみず）市の港町に住む主人公・渋谷真白が、東京から町を訪れたカメラマンに恋心を抱く物語。反対する家族を押し切り、いとしい人のもとへ会いに行こうとする真白だが...

「障害持って生まれたからって、人を好きになっちゃダメなの?」「俺は真白に、できる限りつらい思いをさせたくないだけだ」

射水市の港町や立山連峰を舞台に、周りのだれもが真白を大切に思う。両親には娘に普通に恋してほしいという願いと、傷つけない思いが交錯する。

当初は恋を通じた真白の成長を見せようと提案した坂本監督に、北川さんは、あえて淡々と生きる真白の日々の姿を強く推したという。

「弟は何事も淡々と受け止める。そんな力をすごいと思う。弟から感じたり、学んだりしたことを軸に、家族の物語を書いた」と北川さん。坂本監督は「作品の中で、恋は転機。世の中にあふれている家族を撮る感覚だった。そんな視点で見てほしい」と話している。

カンヌ国際映画祭で高評価を得た「あん」も配給したエレファントハウスの増田英明代表の話 インディーズ（自主）作品として極めて完成度が高い。地方に生きる若者の心の動きがしっかり描かれ一目ぼれした。英語版も製作しており「あん」と同様、世界に向け発信していきたい。

<さかもと・よしひろ> 一九八六年、富山市生まれ。拓殖大卒業後、映画製作専門学校を経て富樫森（とがし・しん）監督の下で助監督を経験。「真白の恋」が初めての長編映画となる。

地域交流施設の利用者10万人突破



朝来

神戸新聞 2016年4月10日

利用者が10万人を超えた「とまり木サロンわだやま」＝朝来市和田山町東谷

兵庫県朝来市和田山町東谷の地域交流施設「とまり木サロンわだやま」の利用者が8日、10万人を突破した。2006年10月のオープン以来、憩いの場として地元で親しまれている。

市社会福祉協議会が運営し、地元の女性6人と、障害者自立支援施設「あさごふれ愛の郷」の利用者4人がスタッフを務める。コーヒー、紅茶、昆布茶

など1杯150円の喫茶をはじめ、折り紙教室、ハンドマッサージ、野菜の朝市など各種イベントも開く。10万人目の利用者、雑賀（さいが）忠文さん（67）＝同町法道寺＝には、スタッフから記念品が贈られた。雑賀さんは「気軽に立ち寄れる『たまり場』のような存在。知った顔とワイワイできるのが魅力」と話した。

JR和田山駅の前にあるため、バスや電車の待ち時間、市外の人や観光客が立ち寄ることも。スタッフの女性＝同町東和田＝は「おしゃべりを楽しんで笑顔で帰ってもらうのが一番の喜びです」と話した。午前9時半～午後5時。土日曜、祝日は休み。市社協和田山地域センターTEL079・672・0440（長谷部崇）

「考えるより体が先に」＝梅田暴走事故で応急処置－医療専門学校生に感謝状・大阪

時事通信 2016年4月9日

大阪市北区の阪急梅田駅近くの繁華街で乗用車が暴走し11人が死傷した事故で、救急隊の到着までけが人の応急処置に当たった専門学校生3人にこのほど、同市北消防署から感謝状が贈られた。このうち大阪府の学生(29)が取材に応じ、「人を助けたいという気持ちで、考えるよりも体が先に動いていた」と振り返った。

3人は理学療法士を目指し、「大阪医専」(大阪市北区)に通学。事故当時は昼食を取るため、現場交差点の西側歩道を歩いていた。



大阪・梅田の暴走事故で、けが人の応急処置に当たったとして、大阪市北消防署の木村忠彦署長(中央奥)から感謝状を贈られる専門学校生3人=7日、大阪市北区



車道から「カーン」という金属音が聞こえ、車のサイドミラーの破片が足元に飛んできた。車が一瞬で横を通り過ぎ、交差点に進入。次の瞬間、「人が宙を舞った」

交差点の東側歩道に駆け付けると、頭から血を流し意識を失っている男性がいた。救急医療の授業内容を思い出し、持っていたタオルとマフラーを当てて止血。近くのホテルの従業員が持ってきた氷の袋も当てた。

男性の手当てを他の2人に任せ、ホテルの花壇に衝突した車へ駆け寄った。運転席の大橋篤さん(51)=死亡=はけいれんし、発作を起こしているように見えた。呼吸をしやすいうように洋服のボタンを外し、シートを倒して横にした。

その後男性のところへ戻ると、意識を取り戻していた。手を握りながら、「大丈夫やから。もうすぐ救急車が来るから」と声を掛け続けた。

木村忠彦・大阪市北消防署長は「交通事故では、現場に居合わせた人たちの初動によって、(けが人の容体が)変わってくる。素晴らしい活動をしてくれた」と称賛した。

学生は事故以来、応急処置に使えるポリ袋を持ち歩くようにしている。「感謝状を『医療人』としての励みに、もっと知識を深め、広めていきたい」と力を込めた。

天地人

東奥日報 2016年4月9日

いかに待ち望まれていた法律か。障害者差別解消法が施行された1日、青森市の障害者団体の事務所では大きなケーキを囲んでお祝いをした。各地でパレードも行われた。法律は障害を理由とする不当な扱いを禁じ、必要に応じた「合理的配慮」を公的機関や民間事業者に求める。ただ期待のわりに、いまひとつ社会に浸透していない。12年前に弘前市で開かれたチェコ出身の彫刻家ズビネック・セカールの作品展のことが思い起こされる。目の不自由な来場者が彫刻に触れて鑑賞できるようさまざまに配慮された珍しい展覧会だった。点字パンフレットも用意されていた。「抽象的な形は視力のあったころに見たピカソの絵を思い出した」。凹凸の具合やブロンズの肌触りを、両手で包み込むように確かめていた来場者の言葉が弾んでいた。車いすの人が段差を移動する時に補助したり、聴覚障害者に筆談で応じるのも同じこと。「合理的配慮」とは堅苦しい響きだが「前例がない」などと言わず可能な限りできる方法を探ることをいう。視覚障害者の手を引いて鑑賞を支えた学生ボランティアの言葉が記事に残る。「だんだん自分なりの感じ方を見つけていく様子に、こちらもうれしくなった」。違いを認め合い、支え支えられ、互いが豊かになれる。目指すのはそんな社会ではないか。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行